

稀な経過をたどった鼻性頭蓋内合併症の1例

鈴木元彦 中村善久 高橋真理子 戸田興介
佐藤雄二 稲垣 彰 村上信五
名古屋市立大学大学院医学研究科耳鼻神経感覚医学

【はじめに】近年鼻性頭蓋内合併症は抗生剤の進歩とともに減少しているが、一旦発症すると致命的になりえる。今回私たちは、稀な経過をたどった鼻性頭蓋内合併症の1例を経験したので報告する。

【症 例】28歳，男性。平成16年1月5日頃より発熱や頭痛が出現した。1月20日髄膜炎と診断され総合病院に入院した。頭部CTにて前頭洞炎や左前頭部正中から左側に認める硬膜外膿瘍を認め、1月22日当院紹介となった。同日当院入院，左鼻内前頭洞手術を施行した。また，抗生剤MEPMによる点滴治療も開始した。術中に採取した膿汁の細菌検査の結果では *Streptococcus anginosus* と *Peptostreptococcus* sp. が検出された。術後，頭痛や発熱などの臨床症状は軽快，血液検査結果も改善した。術後のCT所見では前頭洞炎，左前頭部正中から左側に認める硬膜外膿瘍は消失した。しかし，反対側の右前頭部に硬膜外膿瘍，硬膜下膿瘍を認めるようになった。経過観察していたが，画像検査上硬膜外膿瘍，硬膜下膿瘍の増大を認め，2月27日当院脳外科にて穿頭ドレナージ術を施行した。以後，膿瘍は消失，3月27日退院となった。以後現在まで再発は認められない。

【考 察】鼻性頭蓋内合併症では，術後，治療後に症状や検査結果が軽快していても，詳細な検査や観察が必要と思われた。